

冬の巡礼

志水辰夫
Tatsuo Shimizu



A black and white illustration of a traditional Japanese building at night. The building has dark wooden walls and several windows with white lattice patterns. A branch with leaves and snow-covered buds extends from the left side of the building. The foreground is a dark, wavy surface, possibly water, reflecting the building and the falling petals. The overall atmosphere is serene and quiet.

志水辰夫

Tatsuo Shimizu

角川書店

●志水辰夫（しみず たつお）

1936年、高知県生まれ。『飢えて狼』で冒険小説界に鮮烈なデビューを果たし、『裂けて海峡』『行きずりの街』などでセンチメンタル・ハードボイルドともいうべきジャンルを独自のスタイルで切り拓く。格調高い文体から生まれる物語の深い味わいは“志水節”と呼ばれ、読者を魅了し続けている。『背いて故郷』で日本推理作家協会賞、『行きずりの街』で日本冒険小説協会大賞を受賞。他に『帰りなん、いざ』『滅びし者へ』、短編集『いまひとたびの』など。

冬の巡礼

1994年10月31日 初版発行

1994年12月10日 3版発行

著 者——志水辰夫

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

〒102 東京都千代田区富士見 2-13-3

振替 00130-9-195208

Phone：営業部▶ 03-3817-8521

編集部▶ 03-3817-8461



印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

●定価はカバーに明記してあります。

●落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan

ISBN-4-04-872826-1 C0093

冬の巡礼

装丁・装画
藤田新策

雪が急に深くなってきたかと思うと、いつの間にか川の流れが逆になっていた。日本海の方へ向かっている。高山ではまだ穏やかな雪景色だったのに、飛驒古川から粉雪が舞いはじめ、そこそあつという間に雪の厚みが増してきた。その変化の激しさに感覚が追いつけないまま、山峡の、雪の下から掘り出したかと思われるような無人駅に下り立っていた。

ホームの後の、見上げるような高さの山間から雪煙が上がっている。針葉樹の森で雪が枝から落ちていたのだった。前にある川は、石を投げたら対岸まで届きそうなくらいの川幅しかない。その右岸に、鉄路と人家がわずかな隙間を見つけてしがみついていた。列車を下りたのは三人。わたしをのぞくふたりは女子学生と五十年配のシヨールをかぶった女性で、いかにももの慣れた足取りで駅舎を出るとすぐさまいなくなった。足下がたしかだと思ったのも道理、ふたりともレインシューズを履いていた。

誰もいない待合室の中で石油ストーブが燃えていた。木製のベンチにはパッチワークした座布団が敷かれ、コーナリーの棚には持ち寄った漫画雑誌が並べられている。花瓶に挿してある本物のネコヤナギ。清潔で、快適で、空虚だった。壁に村営バスの時間表が貼つてある。二方向へ一日六便ずつ出ている。ただしすべての列車に接続しているわけではなさそうで、駅周辺にはひとり子ひとり見当たらなかった。

駅前に立つてすべてのものが盛り上がっている雪景色を呆然と眺めていた。平坦部で一メートル、物陰になると軽く二メートルは越えていよう。これほど雪が深いところだとは思つてもみなかった。

道路は駅を起点に北へ延びている。人家はその両脇へまばらに並び、いちばん手前の家に食堂という看板が見える。雑貨屋兼用でパンや入漁券も売っているようだが、表戸はびったり閉ざされていた。その先に旅館の看板がひとつ。二軒ともまったく普通の民家だった。白壁、切妻で、平入り、軒の下にのぞかせている垂木の木口を白く塗るなど、この地方独特の様式を見せている。高山周辺とちがうのは、家の周囲に板を張り巡らして雪囲いをしていることで、入り口にカーテン状のビニールをぶら下げて雪の吹き込むのを防いでいる家もある。見回したところ公衆電話さえ見当たらなかった。村営バス以外の交通機関もなさそうで、この分ではタクシーもないと思わなければならぬだろう。

食堂で電話を借りようと思ひかけたとき、はじめて人間を見かけた。どこから出てきたのか知らない。顔を回したときは道路の真ん中に立っていた。女性である。歯ブラシをくわえていた。

不自然な感じのする白い顔、ソバージュ、派手な柄物のスカート。わたし以上に向こうがびつくりしていた。それから笑った。多分に曖昧な笑みだったのは、あまりきりつとしていたとはいえない自分の格好を恥じたからにちがいがなかった。年齢三十四、五。あるいはもうすこし若くて、わたしと同じくらいかもしれない。

彼女の後の、道路から一段下がった民家の間に『めぐみ』と書いた看板が見えていた。もとは倉庫か倉だったと思われる建物を改装したもので、ドーランを塗りたくったみたいな白いドアと、軒先に下がったガス灯風のあざとい明かりとがいかにも異質だった。

「用事？」歯ブラシをくわえたまま言った。よほどわたしがもの言いたげだったらしい。

「タクシーはありませんか」

「古川から呼ばなきゃないわ」わたしの風体に素早く目を走らせると言った。「呼ぶ？」

「お願いします」

「来て」

石段を五つ下りて店の裏側に回った。こちらにもドアがあった。彼女が先の中へ入り、明かりをつけた。「お入んなさい。寒いでしょう」すぐに石油ヒーターがうなりはじめた。彼女のほうも素足にサンダルばきだ。カウンターの下の流しですぐさま歯をすすぎはじめた。身のこなしが意外にもきびきびしていた。

「どこまで行くの？」

「大谷というところです」

いくらか長めの顔、目も口許も小さくて、眉が薄い。どちらかといえど控えめな容貌だが、きちんと化粧したらもつと映えるだろう。艶やかな髪が洗いたてみたいに光っていた。身体はやや華奢、ざつくりしたセーターを通してほっそりしている肩の線が感じ取れる。

「知らないわね。聞いてもしようがないのよ。このことは全然知らないんだから」

「地元の方じゃないんですか」

「とにかくいま住んでることはたしかだけど」顔を上げてこちらを見た。濡れた口許を拭いもしない。「住めば都よ。そう思うことにしてるの」

「こんなに雪が深いとは思いませんでした」

「いまになって降ってきたのよ。先週までろくになかったの。あなたの靴ではちよつと無理じゃないかしら」

大阪へ仕事の打合せに行った帰りだった。上にこそダウンジャケットを着込んでいたが、足下には中途半端な靴を履いていた。はじめから帰りにここへ寄ろうと決めていたので、本当はトレーニングシューズにしたかった。しかし中之島のオフィス街へそういう靴で尋ねて行くわけにもいかなかったのだった。

「お昼、すんだの」

「駅弁を食べました」

「その身体だったらまだ入るでしょう。食べていきなさいよ。いまご飯炊いてるところだから」
「ご馳走して下さるんですか」

「その代り、なんにもないわよ。ひとりで食べたっておいしくないからね」ここで待っているように言くと、裏口から出て行った。

戻って来るのにだいぶ時間がかかった。時刻は間もなく午後二時になろうとしている。わたしはカウンターに寄りかかり、ヒーターで足下を温めた。スタンドが六つと、十人くらい座れるボックスシートだけでいっぱいという広さ。カラオケ装置がカウンターの脇、トイレのドアがその横で、ピンク電話はこちらのカウンターの端に置かれていた。国産ウイスキーのボトルが棚に二十ばかり並んでいる。埃のこびりついた招き猫と、どこかの神社のお札、九州土産の地名入り提灯。壁に厚手のカーテンが下がっているのは、遮音のためというより内装費の節約のためだろう。あまり金がかかっていなかった。金をかけられるほど客があるとも思えなかった。

彼女の戻りが遅いので、ピンク電話を使って坂倉博光の家にダイヤルしてみた。呼び出し音はするものの、電話口には誰も出なかった。もう二十回以上かけている。

彼女は炊飯器はじめ、バスケットや紙袋を両手に抱えて戻ってきた。遅くなったはず、化粧をしている。十倍はきれいになっていた。こういう暗いところより、外で見たほうがはるかに見栄えのする顔だった。服装も変わり、スカートも丈が足下まである暖かそうなものにはき替えていた。

「冷蔵庫を漁ってきたわ」持ってきた籠の中からいろんなものを取り出しながら言った。茶碗とお椀を二つカウンターに並べる。「といっても何にもないのよ」

「買ひ物はどこへ行くんですか」

「ふだんは村のスーパ―ですませているわね。あとは高山へ行く人に頼むくらい。自分で出かけることはあんまりないの。車がないと不便なところだし、わたしは持つてないし。いつもだとまだ寝てるのよ。今日は郵便屋さんに起こされたものだから」

「毎晩遅いんですか」

「その日によるわね。十二時に一応看板落とすんだけど、一時二時まで歌って、まだ帰らない客だっているから」

「酒より歌うのが目的なんだ」

「娯楽といえるものが何にもないのよ。パチンコ屋だつてないし。あとは飲んで歌うだけ。ここだと少々飲んだつて車運転して帰れるからね」

鍋の水が沸騰してくると昆布と鰹節かつおぶしでだしを取りはじめた。中に入れるものは豆腐と油揚げと筍たけのこがきゴボウ。味噌汁の用意がほとんどできあがったところで、鍋を下ろして焼き網を掛けた。今度はアジの干物を焼きはじめる。こんろがひとつしかないせいだった。

「こんなところまで何しに來たの」

「人を探ねて行きます。ただ、さっきもこの電話を借りてかけてみたんだけど、先方が出ないんです。もう三日かけている」

「このごろはみんな働きに出てるからね。どこへ行つても年寄りしか残つてないわよ」

「尋ねて行くところも年寄りの家なんです」

「夕方まで待つてみたら」

「確実に帰つてくるとわかつていたら待ちます」

「明太子食べる？」　タッパージュエアを取りだして言った。「ちょっと辛いのを送ってもらったんだけど」

「大好きです」

「目玉焼きなんかだとふだん食べあきてるでしょうからね。よそへ行つたときぐらいきちんとした食事しなきゃ。独身でしょ」

「どうしてわかるんです」

「見たらわかるわよ、それくらい」やや狡猾ようかつそうな目になって言った。「仕事、当ててみましようか。普通のサラリーマンじゃないわね。かといって不動産屋みたいなやくざな商売でもなさそうだし。技術関係かな。といって、コンピューターとか、電気とか、あんまり時代の先端という感じじゃないわね」

「百姓には見えませんか」

「見えないわよ。そりやすこしは日焼けしてるけど」

「じゃ半分当たりだ。百姓もやつてるんです。その合間に土建屋をやってます」

「どつちが主なの」

「どつちも半端。百姓一本じゃ食えないから、出稼ぎに出ているんです」

「どこから来たの」

「一応東京です。といっても多摩のだいぶ田舎ですが」

「青梅おうめのほう？」

「五日市線の沿線です。秋川というところ」

心持ち懐かしそうな顔をした。しかしそれほど明るい表情ではなかった。唇の端にいくらか皺しわを寄せてうなずき、逸らすみたいに目をこんろに戻した。彼女の容貌が先ほどの印象とちがい、人工的な光でのほうがより自然な雰囲気を持つていることに気づいた。年齢もわたしより四つ五つ上かもしれない。

「東京にいたんですか」

「いたこともあるわよ。いろんなところで暮らしてきたから。とても全部は思い出せない」

「ここへはいつ来たんです」

「はじめての冬を越したところよ。頼まれてほんの一月のつもりだったけど、なんかこのままずるずるいきそうで、半分怖くなっているの。人間てすぐ慣れるものなのよ。刺激がなければないで、それに慣れてしまおうとすごく楽なの。なにも考えなくていいし、なにも悩まなくていいし」

ふたたび味噌汁をこんろにかけ、煮え立つてくると火を弱めて味噌を溶き入れた。茶碗にご飯をよそい、小皿と一緒にわたしの前へ並べる。湯気の立っているあつあつの味噌汁に三つ葉が浮かんでいた。

「すごいな」

アジの干物があつて、筍たけのこと里芋と椎茸しいたけの煮物があつて、お浸しと、漬け物と、辛し明太子のつ

いた昼食だ。それに引き比べ、今朝大阪のビジネスホテルで食った千二百円のバイキング朝食の貧しかったこと。

「感激してもらおうほどのものじゃないけど、温かいのだけがご馳走だから、どうぞ冷めないうちに召し上がって。お代りしてね。量だけはたっぷりあるから」

いただきます、と箸を取った。彼女も向かいヘスツールを持ってきて腰を乗せた。わたしの視線よりやや下。ふたりともいくらか照れ気味だったが、彼女が「なんか恥ずかしいわね」と言つてその気分を和らげてくれた。味噌汁を一口すり「うん、わたしにしたら上できだわ。一緒に食べてくれる人がいると、張り合いがちがうのよね」

「一緒にご飯を食べようと言ってくれる人はいないんですか」

「いやなこと聞くわね。あなただつていないくせに」

「ぼくは慣れています」

「いい男なのに。いくつ？」

「三十二」

「もったいないわね。商売がいけないのよ。いまどきの若い娘は見てくれのいいものしか追わないから」

お代りを二回した。全部で三杯。食後のデザートにリングまでついていた。何もしないでこういう食事にありついたのは久しぶりだ。

「いまのタクシーは無線だから、呼ぶとすぐ来るわよ」彼女は食後の煙草をくゆらせながら言つ

た。「帰りは古川まで乗ったほうがいいわね。列車の本数だつて増えるし」

かすかな金属音が響いてきた。列車の音だ。

「あら、上りだわ。ひよつとすると村営バスがあるかもよ」

そういえば三時ごろ出るバスがあつたように思う。彼女が前のドアを開けて出て行つたので、わたしも後につづいた。列車は見えなかつたが、すぐ前に立ちはだかつている山の杉林でまた雪煙が上がつていた。列車の振動で新雪が落ちてゐるらしい。雪は止みかけている。

「あら、ちがつたかな」

駅の方を見ていたが誰も出てこなかつた。列車が通つたのはたしかだが、下りた乗客はいなかつたのかもしれない。するとバスは出るのか出ないのか。第一そのバスがどこにも見えない。

二十メートルほど離れた道路脇に泥だらけのワンボックスカーが止まつていた。民家の間から出てきた男が車に戻ろうとしている。

「あなた、これからどこへ行くの？」彼女が問いかけた。

「宮田へ行くが」

不精髭を生やした四十年配の男だつた。頭が薄く、ぎよる目、手が肩から斜めに出て、ドラえもんのような体軀たいくをしている。零度近い気温なのに長袖シャツ一枚という軽装だつた。もつともはち切れそうになつたシャツの間から下に着こんだメリヤスシャツが見えていた。

「大谷というところを通らない？」

「途中だよ」

「じゃこの人を乗せて行つてあげてよ。東京からわざわざ見えたんだつて」

男はいくらか目を細めてわたしを見た。口を半開きにしている。「いいよ」鈍重な顔に戻ると言つた。

「よかつた。じゃこれに乗せてもらいなさいよ」彼女はひとり決めてわたしの方に振り返つた。「なにもタクシー代使うことないわ」

突然だつたので別れはあわただしかつた。わたしは店に引き返して自分のバッグを取つてきた。いくらか食事を置こうとしたが、これは当然とばかり断られた。

「いらないわよ。食事につきあつてもらつたのはわたしの方だから」

「じゃ今日のところはご馳走になります。申し遅れました。鈴木克宏といいます。お名前を聞かせてください」

「いやだわ、そんなに改まるの」軽い媚^こを見せて彼女は言つた。それから看板を指さした。「めぐみでいいじゃない」

「他人の店なんでしょう?」

「ここじゃめぐみで通つてゐるわよ」

「じゃ姓のほうを」

「菅原」

菅原めぐみに礼を言い、助手席に乗り込んだ。商品の配達をしている車だろう、後に段ボール箱を二重ね積み込んでいる。甘つたるい匂いが立ちこめていた。男がペーパーミントガムを噛^かんで

いるせいだった。目いっぱいヒーターを利かせている。ジャンパーが脱ぎ捨ててあつて、男はそれを後に放り投げた。

菅原めぐみは道路の真ん中に立つて見送つていた。確かめたわけではないが、いつまでも見送つていのような気がしてならなかった。

二

「大谷の誰を尋ねて行くんだ」男が尋ねた。

「坂倉澄江さんという人です。お年寄りだと思ひますが、ほかに家族がいるかどうかは知りません」

「知らんなあ。いいよ。聞いてみてやる」

走りはじめてすぐ道がふたつに別れた。川の分岐があつて橋がかかつている。村の中心部らしい町並は橋の向こうに広がっているが、わたしの乗った車はその手前で左に曲がつた。枝分れした川に沿つて山の中へ入つて行く。除雪センターという建物を最後に人家がまったくなくなつた。山が深く、雪がさらに深くなつた。その割りに道路の勾配こうばいはなく、山裾を丹念に拾いながらくねくねと曲がつて行く。左側に流れの浅い川が平行していた。何の手も加えられていない自然のままの川で、鮎漁に関する掲示が出ている。道路には除雪車の残していったキャタピラの跡。走りはじめて五分以上たつのに、まだ対向車に一台も出会つていなかった。